



バイエルン国立歌劇場が6年ぶりに来日した。現地ミュンヘンでは売切れ公演も多く、開場前から「チケット求む」の紙を持って立っているオペラファンをよく目にする。アジアツアーで今シーズンを開けた当歌劇場の魅力を探してみたい。

取材・文：中 東生(音楽ジャーナリスト)

© Yuji Namba

## 特集2 バイエルン国立歌劇場の魅力

### バイエルン国立歌劇場来日記者会見

**ドイツ**で最も勢いのあるピアニストのひとり、イゴール・レヴィットをソリストに招き、バイエルン地方の夏休みを短縮して台湾、韓国と回って来たオーケストラは、その間に舞台の準備やエキストラの稽古を徹底させていたオペラチームと日本で合流し、9月17日のコンサート後、記者会見が開かれた。出席した多数のジャーナリストの第一目的は、インタビュ

嫌いで有名な音楽監督キリル・ペトレンコ氏の生の声を聞くことであつただろう。バツハラ総裁に守られながら、いつになく多くを語ったペトレンコ氏の様子から、彼の日本に対する意気込みが感じられ、好感を与えた。ほかの臨席者のコメントとともに抜粋を紹介したい。

#### キリル・ペトレンコ

(バイエルン国立歌劇場 音楽総監督)

初めての日本に感動している。長い歴史のあるバイエルン国立歌劇場日本ツアーに自分も関わられたのがうれしい。当歌劇場が日常的に上演している3人



キリル・ペトレンコ

の作曲家、モーツァルト、ワーグナー、マーラーの作品で、第一級の歌手陣とともに、自分の任期中に日本に来られたのは幸せだ。

#### ニコラウス・バツハラ

(バイエルン国立歌劇場総裁)

日本の聴衆の、西洋音楽に対する造詣の深さは世界一だと思ふ。今回はちょうど訪日の歴史が始まった頃の演出で今も愛されている『魔笛』と、一番新しいオペラである『タンホイザー』という、新旧両面を披露できてうれしい。なぜならば、歌劇場は博物館ではないので、古いだけの演出は必要ないと考えているからだ。

#### クラウス・フロリアン・フォークト

(『タンホイザー』タンホイザー役)

毎回日本に来られるのを楽しみにしているが、今回はバイエルン歌劇場の歴史に刻まれるツアーに参加できるのがうれしい。このプロダクションがこの役のデビューだったもので、それをすぐに日本の観客に観てもらえて幸せだ。



クラウス・フロリアン・フォークト



アンネッテ・ダッシュ

#### アンネッテ・ダッシュ

(『タンホイザー』エリーザベト役)

前回の来日時は「メリー・ウィドウ」の楽しい役だった。すばらしい日本の観客に、今回は初めてエリーザベトのような音楽的に繊細な役もお見せできるのがうれしい。

#### エレナ・パンクラトヴァ

(『タンホイザー』ヴェーヌス役)

3回目の来日だが、日本人は「感動できる観客」だと思ふ。

#### マティアス・ゲルネ

(『タンホイザー』ヴォルフラム役)

来日回数は多いが、日本でオペラを歌うのは初めてなのでうれしい。

ペトレンコ氏らに向けられた多くの質問から、バツハラ総裁が身を置いてするように発したコメントをもって、半ば強引に記者会見は終了した。総裁、音楽監督ともに唱える「ライヴ主義」の通り、「語るより聴いて」というモットーに貫かれているのだ。



# 『タンホイザー』日本公演 ～現地公演との比較



©Wilfried Hösl

## 題

名役のフォークト氏も「室内楽的なワグナー」と称するペトレンコの音楽作りは繊細で優しく、序曲から観客を包み込む至福感日本でも変わらなかつたが、NHKホールで響に多少苦しんでいた様子が感じられた。ミュンヘンでの初役の際は少々かすれ声で歌い始めたフォークト氏だったが、今は完全にこの役を掌握し、最初から最後まで声の透明感を保ち、主役の威厳を勝ち取っていた。そのため時折折る過ぎる響きを選ぶことには目をつぶりたい。

エリーザベト役に、現地でのアニヤ・ハルテロスの代わりにアンネット・ダッシュウがクレジットされたとき、軽めのレパートリーで世に出た彼女に不安を覚えたが、実際は立派に歌い切り、ハルテロスよりも温かいエリーザベトを演じていた。

ミュンヘンで聴いたクリステイアン・ゲルハーヘルやヴォルフラムは、ペトレンコの音楽作りと最高にマッチしていたため、来日キャストに名がなかったのが惜しまれたが、マティアス・ゲルネはそれを越える歌唱

を聴かせて驚かされた。彼の声の響きは、特に領主ヘルマン役のゲオルグ・ゼッペンフェルト等の典型的ワグナー歌手と並ぶとパワーがない上、声の艶も失われ、キャリアの終焉を思わずにはられないのだが、彼の歌唱力はそれをカバーして余りあるものだった。特に「夕星の歌」等これ以上心の込めなかった方では存在しないのではないだろうか。

ヴェーヌスは変わらず好調なエレーナ・パンクラトヴァが安定した歌唱を聴かせたが、カステルツチの演出では性愛に溺れる究極の姿を表す肉塊に始終包まれたまま動けない。「美の神」を人間がリアルに演じるのは至難の業なので、特にこの配役では賢い解決法だったかもしれない。そのように細かな部分では賛否両論分かれるカステルツチの演出だが、全体を包む幻想的な美は格別だ。昨年度の歌劇場で会った際に『タンホイザー』で日本に行けることを喜んでくれた氏は、この舞台美術のコンセプトを日本に捧げてくれたような気がしてならないので、実際に本人に尋ねてみた。



ロメオ・カステルツチ

「仰る通り、日本の美学とその偉大な図像学は私の『タンホイザー』のコンセプトの焦点のひとつです。ワグナーの『タンホイザー』の中にはアジア的要求が多く含まれていると感じます。例えば歌合戦における騎士道の掟などは、そのようなアジア的傾向で表現したかったものです。

私が深く愛する日本で自分の演出を披露できるのは、毎回とても名誉なことです。限りなくすばらしい日本文化と日本の伝統芸能には感動させられるからです。こうして今回の『タンホイザー』の日本のコンセプトも生まれたのです」

やはりカステルツチの『タンホイザー』は日本へのラブレターでもあったのだ。





## 元バイエルン国立歌劇場専属歌手 中村恵理

バイエルン国立歌劇場専属歌手として2010年から6年間活躍した中村恵理さん。現在もミュンヘンを拠点に、フリーで活躍の場を広げている。JXTG授賞式のため帰国していた中村さんに授賞式後お話をうかがった。

——バイエルン国立歌劇場の専属歌手になった頃のお話を聞かせてください。

**英** 国ロイヤルオペラの研修生だった2009年、

カーディフ国際音楽コンクールでファイナルまで残った翌週、バイエルン国立歌劇場のオーディションの話ももらい、無事合格しました。でも、そのためにロイヤルオペラの研修生2年目は研修所の勉強とバイエルのレパートリーの勉強を両立させていたので、当時は同僚が声をかけるのはばかられたと振り返るほどの悲壮感を漂わせていたそうです。

バイエルン国立歌劇場の1年目は年に40公演ほど出演し、ほぼ全てが新しい役なので多忙でしたが、本場ドイツで歌う初めてのドイツ語オペラとして、今回の日本公演と同じ演出のパミーナも歌うことができました。

このような伝統的演出は、『魔笛』や『ヘンゼルとグレーテル』などの演目には合っているのですが、今後も未永く続けてほしいです。

## 『魔笛』

9月24日 東京文化会館 大ホール 所見



photo\_Kiyonori Hasegawa

**初** 演以来約40年、現地で

愛でられているアウグスト・エヴァーディング演出の『魔笛』は、何度観ても楽しめる。アッシャー・フィッシュの指揮は若々しさを表現するためか、間延びするところがなく、エネルギーが溢れるテンポで進んでいく。

キャストはミュンヘンで愛すべきタミーノを聴かせたマシュー・ポレンツァーニが来

日歌手に名を連ねていなかったのが残念だったが、フィッシュ氏が「このオペラではドイツ語のデイクション等も大切なので、日本ではドイツ人のダニエル・ペーレが歌う」と話してくれた通り、バイロイト音楽祭でも聴かせたドイツの王道歌唱で堂々としたタミーノを演じた。

夜の女王ブレンダ・ラエもバイエルン国立歌劇場の常連だが、現地のオルガ・ブドゥーヴァに並ぶ無難な歌唱を聴かせた。ザラストロのマッティ・サルミネンは欧州では引退コンサートツアーを始めている世代なので、さすがに無理を感じる部分も多々あったが、バス歌手の歴史に名を残す熟練の歌唱を、日本にいながらにして体験できるのは貴重な機会でもあるだろう。共通キャストであるパペーノのミヒャエル・ナジや元バイエルン国立歌劇場専属歌手のハンナ・エリザベス・ミューラーは安定した歌唱と演技で若手の實力を見せた。ミューラーは現地での演奏よりも熱いパミーナを歌いあげ、より満足させられた。



その「ヘンゼルとグレーテル」を2012年に大野和士氏が振りにいらして初共演を果たしましたが、大野氏はオーケストラを歌わせて、暖かい音を引き出されていたのが印象的です。

——ケント・ナガノ元音楽監督とキリル・ペトレンコ現音楽監督の違いは？

おふたりとも楽譜に忠実なのですが、ナガノ氏は厳しいながらも包み込むような方で、ペトレンコ氏はより緻密なものを求められます。稽古を離れると人としての温かさを感じる方です。

例えば今年の1月半ば、バイエルン国立歌劇場の委嘱作品である現代オペラ『南極』でふたりのヒロインのうちひとり調子を崩し、アンダースタディをしていた私が代わりに歌うことになりました。ペトレンコ氏は「オーケストラで手一杯でキューが出せない部分がある。そこは別の人からキューをもらうように」と指示してくれて、本番中も心を砕いてくださいました。幕が降りると真っ先にあいさつしてくれました。

この歌劇場のすばらしさは、特にR・シュトラウスやワーグナーなど「なんて音楽的なオーケストラなんだろう！」と感嘆させるような管弦楽団があり、関わる人、一人ひとりの能力を引き出す力があるところです。

——フリーになったきっかけは？

私は4〜5歳でピアノを始め、中学生のときはトロンボーンもたしなみ、合唱をしているうちに声楽を勧められオペラに進みました。脇役でも音楽で生きていければ幸せなタイプなので、6年間の契約期間にさまざまな役を学べる貴重な体験をしました。ただ、歌劇場との契約中はミュンヘンを離れる場合は稽古や公演がなくとも許可が必要、など制約も多いので永住資格が取れたのをきっかけにフリーとして主役をやるように頑張ってみようと思ったのです。おかげで世界中を回って仕事ができるようになり、日本へもオペラやリサイタルなどで頻繁に帰国できるようになりました。

## バイエルン国立歌劇場合唱団員インタビュー

現在世界の歌劇場では多くの日本人が活躍しているが、バイエルン国立歌劇場来日メンバーにもふたりの日本人合唱団員がいる。そこで『魔笛』の公演後、現場について語っていただいた。

**合** 合唱指揮者は、ペトレンコ氏が振る演目には神経質なほどに準備して練習に臨むのですが、それでもペトレンコ氏は同じ場所を10回も繰り返し返させたりします。私たち自身にもその変化が分かりにくいような小さな部分を追求め、強弱ひとつとっても、ppにおける緊張感のあり方などを模索したり、符点を厳密に再現させたりします。それでもやる気が失せるようなことはなく、そのような練習の重要性が成果から感じられるからこそ、ほかの指揮者が練習時間をオーバーすると文句が出ることもあるのですが、ペトレンコ氏の練習では誰も文句を言わないのです。



丸山晴代(ソプラノ)

5度目の来日公演参加  
シュトゥットガルト留学時代  
に学生席で当歌劇場に通い、  
「合唱団に入るのならこんな歌  
劇場」と決めていたそう



浦野実成(バス)

4度目の来日公演参加  
ミュンヘンに留学し、ハーゲン  
の劇場で3年のソリスト契約  
を得る。バイエルン放送響合唱  
団やミュンヘン音大講師など  
を経たのち当歌劇場合唱団に  
入団

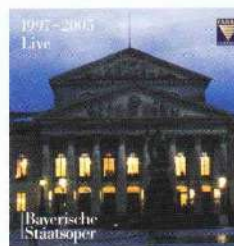
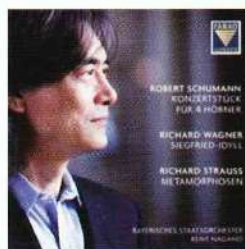
反対に『魔笛』では今までに多くの指揮者と共演してきたので、今の指揮者のテンプを確認するための練習が必要です。フィッシュ氏のテンポ感是比较的早めなので、昔の癖が出ないように本番も集中しています。

この歌劇場の魅力は音楽的アンサンブルの質の高さで、立派なオーケストラがあり、世界的な指揮者や歌手と共演できるのが醍醐味です。また、ミュンヘンの聴衆の温かさも格別です。家族ぐるみのお客さまや何世代にもわたる定期会員もいるほか、2、1000席がほぼ毎晩売り切れるという集客力を誇り、毎晩違う演目ですばらしい公演を提供しています。



## FARAOクラシック

**F**ARAOクラシックはジャンルの越えた多くのアーティストの録音を世に送り出し評価を得ているレーベルである。今年にはケント・ナガノ指揮エーテボリア響楽団の『アルプス交響曲』で「エコー・クラシック最優秀指揮者賞」を受賞した。500年近い歴史を誇るバイエルン国立歌劇場管弦楽団の歴史的な独自の音を残したい、と1997年から2013年までは当歌劇場で録音された多くのCDを世に送り出した。現音楽総監督ペトレンコの録音・販売許可が出ていないため、それ以降の録音は出せていないが、前音楽総監督のケント・ナガノ、その前の音楽総監督だったズビン・メータ等率いるバイエルン国立歌劇場管弦楽団の音楽を聴くと、この管弦楽団の底力が分かる。日本へはキング・



## 支える場外の達人たち

## 百貨店Beckの音楽フロア



**時**間が許せば、マリエン広場の地下鉄駅に直結している老舗百貨店Beck最上階にある音楽フロアも訪れたい。12万種類もの録音を扱い、世界でも、日本の楽器店に次ぐ店舗面積を誇り、もちろんドイツ最大の音楽店である。2008年の改装後、ドイツのレコード大賞「エコー・クラシック賞」の「最優秀総合様式専門店賞」を受賞2010年には同じくエコー賞の「最優秀ジャズコーナー賞」も受賞されている。



現代の「イケメンテノール」ヨナス・カウフマンのサイン会には、店から溢れるほどのファンが押し掛け、ボディガードが四隅に立っていた

エスカレーターが5階に着くと、カラスやクライバー、カラヤン等の大きな写真が迎えてくれ、(右写真参照)全てのCDを店内で何時間でも試聴することができる。時間を忘れて音楽に没頭できるとあって、常連客にはプロも多い。そこからフロアマネージャーのブリュル氏は彼らを招き、店内でミニコンサートや公開インタビュー、サイン会などが催されることになった。歌劇場で歌っている歌手たちも休日を訪れ、サインをしたり、ファンとの交流を深めている。公演情報を宣伝する効果もあり、バイエルン国立歌劇場の「満員御礼」に一役買っている。今までに招いたオペラ歌手、指揮者のリストには世界的に著名なアーティストが名を連ねている。



高級感あふれる広々としたフロア



# バイエルン国立歌劇場の 「オペラ座の怪人」インタビュー



インターナショナルが輸入・販売を受け持っている。

ペトレンコ指揮の録音ではBel Airクラシックが『ルル』のDVD化に成功している。斬新な演出を、ペトレンコの解釈で優雅に演奏されるベルクの音楽が上品に縁取り、一見の価値がある。

## 歌劇場を

の名称で現地の新聞にも取り上げられたアンドレアス・フリーザー氏は、歌劇場内にある

Beck (詳細は右下の項参照)の支店を切り盛りする名物店主だ。ご覧の通り「怪人」の名に似つかわしくない風貌なのだが、「オペラ座の怪人」と呼ぶにふさわしいほど、この歌劇場に精通している、という意味で名付けられたらしい。その上、買い求めたい録音がこのショップの在庫にない場合、次の休憩までに本店に取りに行ってくれるそうなので、ぜひ開演前に余裕を持つてのぞいてみたい。

フリーザー氏は当歌劇場の歴史やレパートリーなど全て把握しているほか、歌劇場内見学ツアーや開演前の作品解説も受け持ち、音楽学者並みの知識を持つ。歌劇場関係者も彼には一目置いていて、当歌劇場のオペラ上演には欠か

せない存在になっている。フリーザー氏は次のように語る。

「当歌劇場は2014年、ドイツのオペラ専門誌『オーバンヴェルト』が選ぶ最優秀歌劇場、最優秀管弦楽団、最優秀演目、最優秀新人賞の4部門を受賞しました。

その前身は1651年に建てられたドイツ初の独立した歌劇場で、1780年には大衆に開放されました。モーツァルトもこの劇場で大変気に入り、委嘱作品として『偽の女庭師』を書き、1781年には『イドメネオ』を初演しました。ワーグナーのオペラも5作品初演されているためか、ミュンヘンのオペラファンにとっては、誇り高く保守的で特別な存在感を放っています。R・シユトラウスが2作品だけしか初演させてもらえなかったのは、当時としてはスキヤ



まだ学生だった頃から常連客のディアナ・ダムラウは世界で活躍するオペラ歌手になっても、Beckに「里帰り」する

歌手ではネトレブコ、バルトリ、ゲオルグユール、アラニーヤ、ハルテロス、デイドナート等、指揮者ではゲルギエフ、ナガノなど、中には取材許可すらなかなか下りないスターを間近に、しかも無料で体験できるというぜいたくに、ファンが押し寄せるのである。

ングラスだった彼の題材が、保守的なミュンヘンの音楽界に受け入れられなかったからです。現在もミュンヘンは北ドイツのベルリンと並ぶ音楽の首都といえますが、オペラに絞れば約360年にわたる歴史が刻まれたドイツ最古の都市です。

歴代の音楽監督はヘルマン・レーヴィ、R・シユトラウス、ブルーノ・ワルター、ゲオルク・シオルテイ、ルドルフ・ケンペ、ヴォルフガング・サヴァリッシュ、ズビン・メータ、ケント・ナガノ等に受け継がれていますが、1992年まで音楽総監督を務めたサヴァリッシュ時代には、市川猿之助が演出した『影のない女』を携えた日本ツアーも大成功しており、日本へ行くことは、当劇場にとって特別な行事となっているのです」